

とを考えると、重要なことは神経系の型（前出・柏木の論文）との関連である。例えば神経系の強い変異型と弱い型のイヌのステレオタイプを乱したときの血糖値の変化を調べた実験では前者は正常の場合と余り変化がなかったが後者では正常のときとステレオタイプを乱したときでは大きな差がみられた。

このことは、神経系の型によって、同じ気象変化の急変に際しても、生体の変調の表われ方が異なるという事実を証明していることになる。

以上のことより、この問題の結論として、次のことがいえる。

(1) 気象要素の変動は、それぞれがある期間において、定常的な変化をしていて、それが生体に対して継続複合自然条件刺激となっている。そして、それらとの間に一つのステレオタイプが形成されている。

(2) 前線通過のような急変な気象状態の変動は、形成されたステレオタイプをこわし、神経系の型によっては、それが、種々の不良徴候の原因となる。

それ故、今後は継時複合自然条件刺激としての気象変動の研究、神経系の型ともいわれる気象病との関連の追究が、これからの課題であろう。

(気象研究所)

4. 季節病, 統計学的研究

松岡 脩吉 (東大公衆衛生学教室)

(日本温泉気候学会雑誌発表ずみにつき要旨を約す)

〔書評〕

地震の科学 笠原 慶一 著
B 6 190頁 280円
恒星社厚生閣

木 沢 経

「地震の予知」ができたならば、その恐しい災害から守りうる人命財産は、はかり知れない程大きなものである。第2次世界戦争で日本が蒙ったと同じ位の災害を今後もしつ受けるか知れない吾々の宿命である。

笠原氏はそうした宿命を何とかして食い止めようとする念願を発端として、地震の予知への関心を学問的に、しかも極めて、平易に此の書物で導いた。

「地震はなぜ起るか」「地震の災害はどうして防ぐか」「地震の予知は可能だろうか」等、人類の歴史始めて以来考え続けられて来た難問が、どのようにして研究されて来たか、そしてどの程度までわかって来ているか、専門家が目標としている数多くの課題を中心に、11章190頁から成る本書に地震現象の基本的知識をわかり易く説明している。とりわけV章、大自然のなぞを解く鍵(その1)、VI章(その2)、VII章大地震はどの様にして起るか、X章地震の予知等の章に多くの頁をさいて地震予知への明い道を読者に示しながら、地震学の将来を暗示したことは見事である。

過去における重要な事柄は、地震学の夜明け時代から写真や図表を沢山そろえて説明し「I 地震学が生れるまで」から近年の諸成果の数々も各章に織込んで新鮮な傾向を見せている。また地下資源探鉱の応用問題にまで、

地震学の全般に亘った解説を具体的にこなしていることは有難いことである。数式はほとんど掲げず、図表、写真を数多く駆使して、すべての難問を子供の手を取って不思議の国を案内するような親切さで説明してくれるから、一般社会人にも中学生にも大変判りやすく、われわれにとってはまた有意義な書である。一読謬達な文章に魅了されて終りまで本をおくことができずに読みつづけてしまう。

これだけの労作は、同氏の学識の深さを窺い知る半面、斯学に対する求道の熱情に敬意を表したい。

欲を云えば、深い処に起った地震の発見と、その発展には、向後の諸問題と共に、地球内部の構造を知る上に、重要な事項を含んでいることを見逃さない点。今一つは、地震の波は、過去において、土地だけ(固体の弾性体)を対照として研究され発展して来たが、近年は特に、海とか大気とか今日迄忘れられて来た別の分野、即ち、流体の方面に研究が展開して来た。特に諸外国では、これが、最近最もにぎやかな話題の一つになりつつある点にも、余勢をかって指唆を与えて貰えたら更に有意義な感じがした。しかし、頁数や色々と制限もあることゆえ、注文する方が無理かも知れない。